

映画

の中の

子ども
たち

第10回
「オレンジと太陽」

ーソーシャルワークの理想を見たー

川崎 二三彦

発端

「それは不可能よ」

「違法です！ 保護者なしで船に乗せるなんて」

偶然聞かされたエピソードを、最初は言下に否定したマーガレットだったが、次第に疑い、調査を始め、ついには信じ難い事実と直面する。では、その事実とは……

*

「悲しいことだが、ゆりかご^{から}が空であることが過疎の一因となっている時代には、外部に供給源を求める必要があります。そしてもしこの不足を我々と同じ人種で補うことができなければ、我々は近隣地域に住む多産な無数のアジア人諸種族の脅威に自らの身をさらすままになったはずであります」

こう演説したのは、西オーストラリア・パースの大司教。1938年8月、8歳から12歳までの子どもたち37人がイギリスから到着した歓迎会の席のことだ。大司教は続ける。

「若年の少年少女を連れて来て農業や家事を初歩から教え込むという現在採用している政策は、遥かに良識にかなった方法であります。これには、子供たちを初手からオーストラリアの環境になじませ、オーストラリア人の感情や理想を彼らの中にしみ込ませるといふ付加価値があります。これこそ真



の市民の本質的特徴となるものであります」

イギリスのソーシャルワーカーであり、自らの活動を「からのゆりかごー大英帝国の迷い子たちー」として著したマーガレット・ハンフリーズは、その著書の中で、この点につき次のように述べる。

「計画の裏にある論理がはっきりしてきた。英国は社会福祉問題を解消するために金を払い、一方、オーストラリアは人口を増やす」

衝撃

本作を観て、私はじっとしていられなくなった。それはまず何よりも、戦後も長く続いたイギリスの児童移民政策に対する衝撃による。

映画終了後、その場で買い込んだ分厚い本を読み進むうちに、事実、私は激しいダメージを受けてしまった。イギリスからオーストラリアに渡った子どもたちは、孤児院に収容されて過酷な環境に置かれ、養育者による虐待の数々は、文字どおり筆舌には尽くせない。しかも数十年後の今に至るまで自らの名前や年齢さえも間違われ、自分が誰であるかがわからないのである。過去を奪われた人間が味わう比類なき苦しみというものを、これでもかと言うほど次々と目の当たりにさせられ、私は耐えきれなくなってしまった。

「その人まだ生きていますか？」

「ええ、生きています」

「信じられない。こんなに運がいいなんて！ その人、どんな人？」

「美しい方よ」

本書も半ばにさしかかろうとしたところで登場する一コマである。

「私にはお母さんがいるのね！」

もはや限界だった。喫茶店にいた私はたまらず本を閉じ、両手で顔を覆って吹きこぼれそうになる感情を押し殺すしかないのであった。

面接

それにしても、映画ではいくつかの面接場面に感心させられた。たとえば、夫婦でパブを営む女性を訪ねるシーン。

「まあ、もしかして……」

結婚する前に生んだ娘のことを、女性は夫に隠していた。

「静かなところで話しましょう」

「娘はどこに？」

「今はオーストラリアです。そこの孤児院で育ちました」

突然こんなことを聞かされたら、誰だって茫然とし、次の瞬間、泣きじゃくるしかあるまい。私までがその女性を抱きしめたいという衝動に襲われたのだけれど、2人の間にはテーブルがあって思うにまかせない。とその瞬間、マーガレットはそっと手を伸ばし、さりげなく女性の手を握る。「ああ、こういう面接をしたいものだ」と思わずにはいられない心憎い仕草であった。

もう一つ、やはり調査結果を伝えるシーンを紹介しよう。面接のために、彼女は慎重に場所を選ぶ。かつて私も、条件の悪い出張先の面接では椅子や机の位置などを微調整し、多少とも安心して面接できるよう工夫したものだが、彼女は毅然としている。

「ここではダメ。大切な情報を伝える、一生忘れられない日になるの。もっといい部屋を」

選ばれたのは、海を望む瀟洒な一室であった。

「母が見つかった？」

「ええ」

「死んでいたんだね」

「ええ」

驚嘆

それにしても、映画の主人公となったマーガレットのソーシャルワークには驚嘆させられる。彼女がこの活動を



始めたのは1986年。振り返ると、私が見守るようになったのは1989年だから、彼女はいわば私と同時代のソーシャルワーカーだ。

その彼女が予断を捨て、求められるまま真摯に事実に向き合い、僅かな手がかりを頼りに気の遠くなるような調査を続け、わかったことは注意深く当事者に伝え、サポートする。当時の児童移民政策が明るみに出ることを恐れる者から白眼視され、脅迫されて身の危険を感じてもくじけず、ついには英豪両政府が公式の謝罪を表明する。

ことの重大さを前に、彼女は本来の児童福祉業務を^{なげう}擲ち、今なおこの活動に全精力を注ぎ込んでいるというのだが、緻密な調査活動や一つ一つの面接といった個別の援助を超え、期せずして強いソーシャルアクションもなしている。まさに彼女こそ真のソーシャルワーカーと言うべきであろう。

* 2010 / イギリス・オーストラリア

* 鑑賞データ 2012/05/27 岩波ホール

* 公式 HP <http://www.oranges-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16328>

<これまでの連載>

- 第1回 [プレシャス] <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第2回 [クロッシング] <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第3回 [冬の小鳥] <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第4回 「その街の子ども」 <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第5回 「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第6回 「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>
- 第7回 「ラビット・ホール」 <http://bit.ly/wF8G4a>
- 第8回 「サラの鍵」 <http://bit.ly/Hf2MsL>
- 第9回 「少年と自転車」 <http://bit.ly/LXzFK4>